■４－３　伝統

大分市消防団では、訓練や行事、イベント等で伝統を披露しています。

消防団は、そのなりたちから長い歴史をもち、はしご乗りや纏（まとい）振り、地域名を背負った半纏（はんてん）、夜警で使用する拍子木など様々な伝統を生み出し、長い間継承してきました。しかし、消防団の組織体制の変遷や新しい消防装備の登場などによって全国の多くの消防団で徐々に伝統は失われつつあります。消防団が築いた伝統は、地域社会の雰囲気を作るために価値のある資源であり、消防団員自らと住民がその重要性を認識することが重要です。

大分市消防団ラッパ隊は、昭和54年10月に発足。

ラッパ隊の活動は、出初式をはじめ各方面隊の内点検、消防操法大会等、様々なイベントで活躍、団員の士気の高揚に一役かっています。

普段は、基本団員として各種の災害にも出動し活動しています。それぞれが仕事の合間を縫って、月2回の練習を重ね演奏技術の向上に努めています。

纏は、消防団のルーツでもある江戸時代の町火消が用いた各町の旗印で、本市では消防団の新たな伝統づくりとして、各地域の特色を出した形状の纏を各方面隊に１本、合計８本を新調しました。市内で行われる行事やイベントで纏振りを披露することで、消防団の認知度を高めて地域防災力の強化に繋げていくこととしています。

はしご乗りは、竹製のはしごの上で、火事場を探す所作などを盛り込んだ様々な技を披露するものです。元々は江戸時代、町火消が身に着けた技から発祥し、江戸から地方に伝承されていったと言われています。大分市消防団でも現在は、第５方面隊で受け継がれています。